



Title	イスパニアに於ける俗語ラテン語の音韻変化
Author(s)	吉田, 秀太郎
Citation	大阪外国語大学学報. 1960, 8, p. 17-35
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80166
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

イスパニアに於ける俗語ラテン語の音韻変化

吉 田 秀 太 郎

Cambio fonético del latín vulgar

En el caso del español

YOSHIDA Hidetaro

P R O L O G O

La conquista de la península Ibérica por el Imperio Romano ha dejado, no solamente en su época mas floreciente, sino tambien aún despues de su decadencia, un tesoro cultural inborrable que, a pesar de las invasiones de los germanos “bárbaros” y de la larga ocupación de los árabes, no dejó de ser un sostén tanto material como espiritual a los pueblos de esta Península los regímenes de legislación y la cultura del cristianismo. Y no sería demasiado decir que una de las fuerzas que contribuyeron a la formación de una cultura tal fuera la de la unificación del idioma. Es por eso que la lengua latina que tiene una maravillosa tradición cultural vive todavía, aunque en forma bastante diferida, no sólo en España, sino también en Iberoamérica aparte de los idiomas italiano, francés, portugués y otros. De aquí que creo es de gran utllidad y casi imprescindible, para quienes estudiamos el español, la lengua latina y de este modo conocer su origen y su evolución, es decir el proceso de su formación:

Aquí, sin embargo, es de notar que el español actual, objeto de nuestros estudios, no se ha derivado en su comienzo, como en otras lenguas romances, directamente de la lengua literaria sino de la lengua hablada entre los militares, comerciantes, etc., y que las diferencias entre ellas parecen haber sido marcadas, tanto en el sentido fonético y morfológico como semántico. Y he aquí la importancia de ver el latín vulgar como Madre de la Lengua Española.

Ahora, entre los últimos tiempos del Imperio y la invasión germanica hubo, junto con el decaimiento nacional, una decadencia en la literatura, y la lengua latina estaba en estado de caos. Desde el siglo séptimo en adelante algunos que otros, sin contar a los religiosos y sabios, hablaban el latín correctamente. Es dedir, se han introducido en él muchos elementos de tipo vulgar, y la tendencia ésta se supone haber aumentado conspicuamente en la Edad Media.

Claro está que latín vulgar sí que hubo aún en el mismo Imperio, pues no era

exclusivo de España, y para el estudio de esta habla vulgar nunca hacen falta grandes dificultades, la mayor de las cuales está en que la lengua hablada, por su naturaleza, no pasa a la posteridad. Los únicos datos que nos son accesibles son los epitafios, que a veces están escritos erróneamente, usando la lengua hablada, o la comparación con otros idiomas de la misma familia, y por análisis, saber algunas características que se encuentren entre ellos.

En la presente he tenido un gran atrevimiento, sin pensar en mi muy modesto conocimiento de la lengua, al presentar una síntesis de los valiosos estudios de los grandes maestros nacionales españoles y extranjeros.

序

ローマ帝国のイベリア半島征服は、帝国の最盛期は勿論の事、その崩壊後も、依然として消し難い文化遺産を残し、やがておこった彼等の云う「野蛮人」ゲルマン族の侵入や、更に長期にわたるアラビア人の占領にも拘らず、此の国の住民に測り知れぬ物質的・精神的支柱を与え続けずにはおかなかった。それは素晴らしい法律制度であり、キリスト教文化であった。そして、かゝる文化を築き上げるに貢献した大きな力が、彼等の言語統一にあったと云っても過言ではあるまい。かゝるが故に、輝かしい文化の伝統を持つラテン語は、今日も尚、その形こそは変っているが、独りイスパニア本国のみならず、更には中南米諸国に至るまであまねく用いられ、他のロマンス語と共に、生き続けている事は、我々の熟知しているところであり、従って我々イスパニア語を学ぶ者にとっては、その母語たるラテン語の研究を行う事は、その言語の正しい理解のために極めて重要であると信ずる訳である。しかし乍ら、こゝで我々の研究対象であるイスパニア語が、他のロマンス系の言語同様、いわゆる文学上の言葉、或は書きことばから直接に由って来たものではなくして、実は、帝国の植民地の一つとしてのイスパニアに駐屯していた軍人や、或は行商人等が使っていたもので、その差異は言語上の各事項にわたり相当なものであった様である事は、注目すべきである。従って、こゝに俗語ラテン語の研究の意義が生じて来る。

偕、帝国の末期からゲルマン民族の侵入期にかけての時代には、帝国の国力の衰退と共に、文学も衰え、ラテン語は、混乱状態に陥った。7世紀以降になると、もはや正確なラテン語は聖職者や学者が用いるくらいのもので、それすら往々にして的確さを欠く傾向にあった。つまり、そうした古典ラテン語の中に、多分に俗語的な要素が導入された事は事実で、中世に至って、この傾向が一層激しくなったと想像される。一般に、俗語ラテン語は、ローマ帝国内に於てもあった事で、殊更イスパニアに限られたものでない事は先にも述べた通りだが、偕、俗語ラテン語の研

究となると、非常に困難な事態に直面しなければならない。それは先づ、該ラテン語が話し言葉であったと云う事実から、その記録が残っていないのが常であり、たまたま碑文などに間違って書かれた文からその形を推察したり、類推したり、或は中世の文法学者の観察などを参考にしたリ、又は、他のロマンス語と比較して、そこから俗語ラテン語の姿を或る一定の法則を導き出し、それにより再建すると云う形式をとるしか方法はない。こうした現実を省みつゝ、本稿では、これまでになされた言語学者の貴重な研究を基礎として、ラテン語に関する貧弱な知識をも省みず、敢えてその言語の特徴を探ろうと試みた訳である。

第一章 母 音

音声学の見地から、先づ注目すべきは、古典ラテン語が母音及び音節の長さに基く量的乃至は音楽的リズムを有しているに反し、西暦4世紀音から、ロマンス語に本質的な強さのアクセントに変わっていった。つまり質的なものとなったことである。そして、アクセントの変形と共に母音にも根本的な変化がもたらされた。はじめ、音の長さは音色 (timbre) の相違に関係があり、従って長母音は閉音で短母音は開音又は半開音だった。この様にして短音 *ĭ* (開音) は長音 *ī* (閉音) に近づき、同様のことが *e* と *ē* にも生じた。かくて量的な差が次第になくなり、結局俗語ラテンでは古典ラテンにあった十箇の母音から次に示す様に七箇に減少している。

<i>ī</i>	<i>ĭ</i>	<i>ē</i>	<i>ĕ</i>	<i>ā</i>	<i>ă</i>	<i>ō</i>	<i>ō</i>	<i>ŭ</i>	<i>ū</i>		<i>æ</i>	<i>œ</i>	<i>au</i>
↓	↓	↓	↓	↘ ↙		↓	↓	↓	↓		↓	↓	↓
<i>ī</i>	<i>ĭ</i>	<i>e</i>	<i>e</i>	<i>a</i>		<i>o</i>	<i>o</i>	<i>u</i>	<i>u</i>		<i>e</i>	<i>e</i>	<i>au</i>
↓	↘ ↙	↓	↓	↓		↓	↘ ↙	↓	↓		↓	↓	↓
<i>ī</i>		<i>e</i>	<i>e</i>	<i>a</i>		<i>o</i>	<i>o</i>	<i>u</i>			<i>e</i>	<i>e</i>	<i>o</i>
↓	↓	↓	↓	↓		↓	↓	↓	↓		↓	↓	↓
<i>i</i>		<i>e</i>	<i>ie</i>	<i>a</i>		<i>ue</i>	<i>o</i>	<i>u</i>			<i>ie</i>	<i>e</i>	<i>o</i>

I アクセントのある母音

上記の表からもわかる通り、イスパニア語では、開母音の二重母音化現象があるが、この現象は、イスパニア語独得のもので、他のロマンス語には伺えない。更に、同様の事が、閉母音に於てさえ行われることがある。俗語ラテンの母音の研究にあたって、我々は、その音と隣接する音の影響を十分に考慮しなければならない。少数の例外を除いては、アクセントの位置は、大ていの場合、古典ラテン語のそれが、ロマンス語でも同じ場所に保持されている。

marĭtu > *marido*; *quĭndecim* > *quince*; *pópŭlu* > *pueblo*.

ラテン語では、若し与えられた語の最後から二番目の音節がその性質や位置の関係から長いなら、この音節にアクセントが置かれ、(virtūte>virtud), 又該音節が、性質上からも、位置的にも短音節なら最後から三番目にアクセントが置かれた。(arbōre>árbol)

§ 1 古典ラテン語の ā 及び ä に対する俗語ラテンの a

a) 上記の場合の a は通常アクセントを失うなく保存されている。

ānu>año; ad-grātu>agrado; prātu>prado; pars, partem>parte; āla>ala; păter, patrem>padre.

b) i (y) が a の直後に来るか或は次の音節から a に引きつけられる場合、a>e なる現象が生じた。こゝから二重母音 ei (ey) が生じ、更にカスティリアでは簡素化されて e となった。(a-i>e-i>e-e>e)。この括弧内の最初の状態は、既に10世紀頃レオンの方言に見られ、(carraria>carraira), 次の段階は今日のガリシアやレオン地方の方言に見られる (carreira)。その他 laicus, laicum>lego; basium>beso; sartago, sartāgīnem>sartén; vaika>vega; sapiat>sepa などを挙げる事が出来るが、この点、隣のポルトガル語では、その中間の形が存在している (葡 leigo; beigo)。

c) a の次に来る口蓋子音は母音化して i (y) を生じ、更に e を生じた。(-ACT 或は -AX) 唯 ai>ei>e の簡素化は ch>ct より早かった。

factum>古. 西. fecho>hecho (cf. 葡. feito); taxu>tejo axis, axem に対する俗. ラ. acse(m)>古. 西. exe>eye (cf. 葡. eixo); lacte>laite>leche; basium>beso.

d) a の次に来る u は、既に古典ラテン語で二重母音が形成されていたものであろうと (causa) 或いは俗語ラテンでかゝる二重母音が生じたものであろうと (amavit>俗. ラ. amaut), 又次の音節に引きつけられ (sapui>saupi) 或は a の次に来る子音の前の l から生じたもの (alter, alterum>*autro) であらうと、母音 a と相互作用 (同化) を行い、その結果イスパニア語では o となった。(a+u>o+u>o+o) この o に至る段階の一部は、レオン或は北部ポルトガルに見られる二重母音 ou である。

causa>cosa (葡及びレオン cousa); amavit>amaut>amó (葡及びレ. amou; sapui>saupi>古. 西. sope>supe; habui>*haubi>古. 西. hobe>hube; maura>moro (葡. mou-ro); tauru>toro (葡. touro)

§ 2 古典ラテン語の ē 及び ae に対する俗語ラテンの e

a) 隣接音に作用されないときは、俗語ラテンのアクセントのある e は ie と二重母音化した。元来、この際アクセントが二重母音の i の上にあるのか e の上にあるのかこれまでは決定されていなかった。大ていの説は、既に古代イスパニア語でアクセントが e にあったとするが、それ

に反対する者も少くない。

caelum>cielo; ěqua>yegua; graecu>griego; mĕtum>miedo; septem>siete; pĕtra
>pietra; tĕnet>tiene

b) 俗語ラテンの ě の次に来る口蓋音は ě を e に近づけ、二重母音化を妨げる。

supĕrbĭa>soberbia; matĕrĭa>madera; sĕdĕat>*seyat>sea.

次に来る子音の母音化の結果は、その次の子音の口蓋化に大きく作用していると思われる。

lĕctum>*leito (つまり e+口蓋音 y+y の口蓋化の力を受けた t は tš 或は ch に近づく)
lecho; integer, ĩntĕgrum>intĕgrum>entero; provectum>provecho.

こゝに我々の気づく事は spĕcŭlum>*speclum>espejo に於ては成る程接近現象がおこったとは見えるが、vĕtŭlum<veclum>viejo ではそれがおこっていないことである。俗語テランの veclum は Appendix Probi にも見かけられることから、確かにロマンス語発生以前にあったものであり speculum と同じ現象が生ずるより前の時代に属していた。

c) アクセントのある ě は ie と二重母音化したか、この次に来る音節に i (y) がある場合、
ě>i の現象がおこった。

tĕpĭdum>*tiebido>tiebio>(二重の口蓋化力により) tibio

同様に ě の直後の口蓋音 l は ie>iei>i をおこさしめた。

sella>古. 西. siella>silla; -ĕllum>古. 西. -iello>-illo; castellum>castiella>castillo

ě の直前の l は ě から二重母音化した ie の i のを吸収して口蓋化した。

lĕvat>古. 西. lieva (これは lĕvare>古. 西. levar に対抗している)>lleva

d) 連続母音 (hiatus) に於ては ie は i となる。

Dĕus>Dieos>Díos>Diós (後のアクセントの移行により) mĕum>mieo (レオンではまだ
通用している)>mío

又古代イスパニア語の口蓋破擦音 dʒ のあとでは二重母音の i は次の様な場合、吸収されてしまった。

mulĭĕrem>俗. ラ. muliérem>古. 西. mugier>mujer; aliĕnum>ajeno.

e) ie+sp と来る様な場合、ie が i となった。

vĕspera>viespera>vispera (アクセントのない、最後から二番目の音節の母音 e の存続が稀な現象である事に注意すべきである); vĕspa>aviespa (a がついているのは, abeja>apícula の類推によるものだろう)>avispa; prĕssa>priessa>priesa 及び prisa.

上記の現象は、舌の位置を上げて気室を狭めた——これは sp, st の音を出すに必要な動作であるが——結果 ie の e が高められ、i に近づき、i となったと見られる。

§ 3 ラテン語の ē, ĭ, œ から来た俗・ラ. の ē

a) 次に来る音の影響のない時は、俗語ラテンの ē はイスパニア語にそのまま残った。

sēta>*seda*; plēnum>*lleno*; cībum>*cebo*; bibit>*bebe*; poena>*pena*; foedum>*feo*

b) 次に来る音節の口蓋要素は ē を ĭ に接近させる。通常この口蓋化要素 (i) はイスパニア語句に残り、常にその力を行使している。

cērēum>*cirio*; vitreum>*vidrio*

二番目の ĭ は、干渉する子音を失うことによって同様の効を奏し、残存することとなる。

līmpīdum>*limpio*

口蓋化要素がイスパニア語では残らないときは、一般に ē が存続する。i (ē=i であるが) は ē の直後に来るときはそれに吸収される。若しそれか、他の子音によって分離されているときは、その子音の口蓋化に、その力が消費されるかに見える。そこで又、口蓋子音から出た i は e を侵す事がない。

corrīgīa>*correia (correya)>*correa*; dīssīdīum>*desseyo>*deseo*; tristītīa>*tristeza* (又一般に -itia で終る抽象名詞はたいいてい -eza となる); consīlīum>*consejo*; parīcūlum (*parīclum を経て)>*parejo*; rēgula>*reja*; tēctum>*techo*; strīctum>*estrecho*; sīgnum>*seño*; līgnum>*leño*

d) 連続母音の場合、俗語ラテンの ē は i となった。

-ēa (habebam>*habea>*había*; debēbam>*debea>*debía*

e) 語尾のアクセントのない ĭ が ē に働きかけ、それを i に近いものとした。そして語尾の i は後 e となった。

vēnī>*vini*>*víne*; fēcī>古・西. fīzi>*fize*>*hice*

§ 4 ラテン語の ī に対する俗語ラテンの i

俗語ラテンの i はイスパニア語に依然残っている。

fīcum>*higo*; lis, litem>*lid*; vite>*vid*; filiu>*higo*; scriptu>*escrito*; litigat>*lidia*

§ 5 ラテン語の ō に対する俗語ラテンの o

a) アクセントのある俗語ラテンの o は、それを妨げる外的要素のないときは、イスパニア語では二重母音 ue を生ぜしめる。で、その前身は uo だが、それは尚方言とか、姉妹語たるイタリア語に存在する。たとえば *puode, avuola, tuorto, fuoros* などは西部アストゥリアで使われている。カスティリア語の ue は11世紀頃にすでに現れている。尤も12世紀の *Poema del Cid* に uó が依然として韻にふまれている場合もあるが (*fuort, Huosca*) これは、実際この詩

が、カスティリア地方で書かれたものでない事による。その後 -ue なる形は一般化した。

föcum> *fuego*; mors, mörtuum> *muerte*; colloco> *cuelgo*; bonum> *bueno*; rota> *rueda*; ovum> *huevo*; nove> *nueve*; örophānu> *hnérfano*

こうした ě の二重母音化はイスパニア語の特色だがこれは他のロマンス語にこれがないからと云うのではなく、その中に含まれている細部の特徴によるものである。因みにフランス語もイタリアも二重母音化するにはするが、只 ö を自由な音節でのみ二重母音化し、Positio debilis では行わないところにイスパニア語との相違がある。pröba>古. 仏. prouve>11世紀 prueve>13世紀 *preuve*. (この場合イタリア語では *pruova* で、第一の段階)。しかし次の様な場合もある。

pörta>仏 *porte*, 伊 *porta*, 西 *puerta*; cöllum>仏 *col*, 伊 *collo*, 西 *cuello*

b) 一般に口蓋音が次に来る時は、その起源がどうであろうと俗語ラテンの ɔ̄ を ɔ̄ に近づけ、イスパニア語における二重母音化を妨げる。

hödie *俗. ラ. hoye> *hoy*; pödüum> *poyo*; nox, nöctem> *noche*, coxo, 俗. ラ. *coxum>古. 西. coxo (つまり cošo で口蓋化された s を持つ)> *cojo*; fölium の中性複数 fölīa> *hoja*; öcūlum> *ojo*; spolium> *despojo*; molliat> *moja*

古代イスパニア語の fuerça> *fuerza*< förtīa の場合などでは i̇ の力がその破擦音に食われて poyo, noche の場合とかに見られた永続的な口蓋音がなくなった。或は此の例で我々は fuerte の類推を見るのだと云えるかも知れない。口蓋音も n と一しょにある時は明らかに二重母音化を妨げない。

lönge> *lueñe* (これには luengo の影響があるらしい), Saxöñia> *Sansueña*; Gaseöñia>古. 西. Gaseöña> *Gascuña*; Sömnīum> *sueñō* (しかしこれにはラテン語の sömnum の影響がある)

c) 或る場合に於ては、古代イスパニア語で -ue が発達し、やがて e に移行した。或る例に於てはその理由の明確でないものもある。若し ue に先行或いは後行する唇音の結合がある場合前記の縮少は唇音 u̇ の異化によるものであろう。又、若し二箇の子音グループが ue に先行し一音節を作っている場合はその消失は三つもの子音の結合の結果発音の出来にくくなるのを避けるためであらう。何故なら u̇ 自身が子音的価値を持っているのだから。

frons, fröntem>14世紀 fruenta> *frente*; flöccum> flueco> *fleco*; cölübra> *cölöbra> culuebra> *culebra*.

若し ue を含む単語がアクセントを持たず、次に来る単語と一しょになった時 ue は e に縮少されたものと見られる。

hostem antiquam> (h)uest antiqua> *estantigua*; pöst + *aurīculum> puestorejo>

pestrejo

d) 或る種の語では二重の形で発展している。その文章的功能がその発展上の差異を説明している。若しアクセントのある時（この時はアクセントの意味が一層強く、一属文法上の意義を持つ）、それらは二重母音化した。で若しそれがアクセントのない単音綴の形でアクセントのある語の前に置かれた場合には二重母音化しなかった。又最も普通の現象は鼻音+子音が *o* を閉音にするに大きな役割を果している事である。

dömlinum > *dueño* [しかし don Juan など proclítico の時は don (> lat. dömlīne)], comes, cömlitem > *cuende*, しかし Conde Fernán González の場合などは conde である。後 *cuende* は先述の conde が頻繁に用いられる様になったため、消え去っていった。fons, föntem > *fuelle* (しかし地名には fonte が残っている; Fontefrida); pons, pöntem > *puente* (しかし他の語と結合して地名となった時は Pontevedra); homo, hömlīnem > 初期イスパニア語 uemne だがこれは独立している時で proclítico の位置にあるときは omnes de Burgos の様に使われた。この omne はやがて凡ゆる場合に用いられる様になった（ここから hombre が生じている）

§ 6 ラテン語の *o*, *ü* に対する俗.ラ.の *o* 及び *au*

a) 若し隣接する子音の狭めようとする力がない時は俗.ラ.の *o* 及び *ü* はカスティリア語では *o* となった。

hōra > *hora*; lütum > *lodo*; müsca > *mosca*; nōmen > *nombre*; tōtu > *todo*; vōce > *voz*; vōtum, pl. vōta > *boda*

b) 俗.ラ.の二重母音 *au* は古.ラ.の *au* に相当するものだが、カスティリア語では *o* となった。しかしこれは後期に至ってからの現象である。（§ 1. d）を参照されたい）明らかに、*au* の *u*（価値的には半子音）は、長らくの間、その次に来る子音を母音間の子音としての取り扱いを受ける事を妨げた。そこで若ししたとえその子音が無声音であっても有声音化しなかった。

aurum > *oro*; cautum > *coto*; sapuit > *saupit > 古.西. sopo > *supo*

カスティリア語で *au* の残っているのは後に至って習得し発達せしめたものらしい。

causa > *causa*; captivum > *cautivo*; actum > *auto*

c) 先行或いは後行する口蓋化の要素は、それが本来のものであろうと派生したものであろうと（*t* の前の *l* 又は *c* から来た *i*; *gn* から来た *ñ* にある口蓋的要素等）*o* を *u* に近づけた。（§ 5 b）を参照されたい）

jūgun > *yugo*; cōgīto > *俗.ラ. coyito, coyeto > *cuido*; fūgīa > 俗.ラ. *foyo > *huyo*; ōrdio > *urdo*; trūcta > *truita > *trucha*; lūcta > *lucha*; mūltum > *muīto > *mucho* (muy では二重母音

になっている); vōltur, vūlturem>*vulture>*buitre* (こゝで i の存続しているのは、これが t に侵される事がなかった他に, t の次に更に子音があることから, 口蓋化が妨げられたからである); pūgnum>*puño*; cūneum>*cuño*; autumnum>*otoño*; rūbēum>*rubio*; plūvia>*lluvia*; tūrbīdum>*tōrbio>*turbio*.

cl, li, ti の結合は o に影響しなかった。それらの持つ口蓋化力は l 及び t の上に及ぶに運ぎなかった。

gēnūd(ū)lum>*hinojo* (又一般に縮少を意味する接尾語 -ūc(ū)lum は -ojo となった)
pūtēum>*pozo*

§ 7 ラテン語の ū に対する俗.ラ.の u はカスティリア語に残る事となった。

mūtum>*mudo*; fūmum>*humo*; sūcidu>*sucio*; fūtūrum>*futuro*; acūtu>*agudo*; cūpa>*cuba*.

II アクセントのない母音

アクセントのある母音は、既に見た様に常に維持されていたばかりでなく、更には他の母音をも併せ持つ程(二重母音化)強力なものだったが、アクセントのない母音は維持され難いばかりでなく、たとえ維持されてもアクセントのある母音程変化に富むものではなかった。アクセントのない母音の歴史は、それが語頭乃至は最初の音節にあるか或いは語中か又は語尾にあるかによって異っている。最初の位置にあっては大抵の場合は保持されているが、中間乃至は語尾にあっては消えることがある。カスティリア語では *e* と *e* が *e* になり、*o* と *o* が、アクセントのない時は *o* になったので、我々はイスパニア語の母音を取扱うときは *a, e, i, o, u* の五つだけである(カスティリア語で *o* となった俗.ラ.の *au* の他に)。最後の位置では、それらは三つに縮少された(*a, e, o*)、と云うのは *i* は初期に於て *e* と開き、又、ラテン語の *ū* から来た *u* は俗語ラテンでは殆んど存在しをかったから。更にアクセントのある音節の硬口蓋母音 *e* と *i*, 軟口蓋母音 *o* と *u* とはお互に区別がつかず、16世紀に於ても文書にはこの混合が伺われる(*vanedad, envernar, escribir, abundar, roido, cubrir*)。只母音 *a* だけはアクセントがなくとも何処にも維持されたが、その他のアクセントのない母音の運命は先にも述べた通り、その位置により決定される。

A 語頭の位置

§ 1 a

a) 次に来る口蓋音或は唇音に影響されない限り *a* は存続した。

*ānnūcūlu (annus からの派生語)>*añejo*; caballum>*caballo*; labor, laborem>*labor*

b) 次に来る $\underset{\sim}{i}$ 又は $\underset{\sim}{u}$ の影響で、アクセントのある a の場合同様 e 又は o となった。

altarium>otero (意味は違っている); autumnum>otoño; jactare>echar; habuimos>hobimos>hubimos; mansiōnem>俗. ラ. *masionem>*maison>mesón; maxilla>maxilla>mejilla; sapuimus>古. 西. sopimos supimos; *variōla>古. 西. veruela. ここで u の閉音の性質から>viruela.

c) 同化, 異化, 本当の或は見かけ上の接頭語等が a を e にすることがある。

abscondēre, 俗. ラ. *ascondēre>古. 西. asconder. ここで接頭辞 $ex-$ の影響により西 esconder; 俗. ラ. *anē thūlum>*anedlo>古. 西. aneldo, ここで同化により eneldo; a(u)s-cultare>古. 西. ascuchar>escuchar; farrāgine>herrén は異化現象

§ 2 e

b) 次に来るアクセントのある音節の i 或は u により狭められない限り e は残っている。

lēgumen>legumbre; praeco, praecōnem>pregón; 俗. ラ. sīmiliare>semejan; sēniore>señor.

b) 次に来るアクセントの音節の $\underset{\sim}{i}$ の影響により e が i と狭められる現象は同じ状況下に於ける o が u に狭まったと同様でイスパニヤ語の特徴でもある。特に動詞にこれが甚だしい。

semēntem>simiente; pre(he)usionem>presion>prisión; serviāmus>servamos; servīvērunt>servieron>servieron; serviēndum>serviendo>serviendo.

c) $\underset{\sim}{u}$ による狭めは余り多くない。

aegualē>古. 西. egual>igual; 俗. ラ. mīnūāre>古. 西. menguar と同時に minguar (しかし前者だけが残った)

d) この他の e の変化は隣接の r の曖昧化や外国語からの借用語等の様な特別な状況によるものと見られる。

vervactum>barbecho ($e>a$ は r の影響によると見るよりも、次に来る母音への同化の結果と考えられる。silvaticum>salvaje (古. 仏. salvage の影響) balance>balanza; aera-men>alambre; versura (verrere「掃く」から来た)>barrer; civitate>ciudad

§ 3 i

a) i は通常存続した。

titio, titiōnem>tizón; rāpāria>ribera; limitare>lindas; hibernu>inverno

b) しかし、次に来るアクセントのある i からの異化により e となる事もある。

vicinum>vizino (cf. ptg. vizinho)>古. 西. vezino>vecino; dicēre, 俗. ラ. dicire>dizir>古. 西. dezir>西. decir; ridēre, 俗. ラ. ridire>古. 西. riir>reír

§ 4 o

a) 先行し或は次に来る何らの力により狭められない限り o は(俗.ラ. au から来たイスパニア語の o をも含めて) そのまゝ残った。

cōrticea>*corteza*; domīniare>*domeñar*; sūperbia>*soberbia*; nōmīnāre>*nombrar*;
cōrōna>*corona*; suspecta>*sospecha*; aurīcūla>*oreja*; pausare>*posar*

b) 先行する口蓋音の結果として o が u に変る事がある。一般にこの変化は e が i に変わるよりも一層頻繁である。

俗.ラ. jōcāre>古.西. jogar>*jugar*; cōlōlra>*culuebra*>*culebra*; lōcāre>古.西. logar>
lugar; cognatu>*cuñado*; tōrcūlare>*trujal*

c) 次に来る i 或は u は o を u に狭めた。

molīerem>古.西. mugīer>*mujer*; cōgnātum>*cuñado*; dormīvērunt>*dormieron*>
durmieron; dōrmīamus>*durmamos*; dōrmīendum>*durmiendo*.

d) アクセントのある o からの異化により語の最初の音節にある o は特に隣接するに r より曖昧にされると e になる事が出来る。

formōsum>*hermoso*; rotūndum>*rodondo*>*redondo*; hōrōlōgiu>仏. horloge>*ro-*
loz (z=仏の e の前の j 又は g)>古.西. reloxi>*reloj*

§ 5 u

a) 俗.ラ. u はイスパニア語でも保持せられた。

mūtāre>*mudar*; lūna, lunam>*luna*; dūritia>*dureza*; sūdare>*sudar*; cūrare>*curar*

B 語中の位置

§ 1 最後から三番目の音節にアクセントがある語の、最後から二番目のアクセントのない音節の母音 (vocal postónica)

a) 上記の場合、若しその母音が a でないか、或いは次に子音との結合がない時には、一般に消失した。既に古典作家の中にも、calidus の代りに caldo を用いたり、Plauto の様に domīnus の代りに domnus を用いた者もある。

comītem>*cuende* と conde; lēpōnem>*liebre*; cōmpūtum>*cuento*; solidus>*suelto*

或る場合には母音間の無声子音が有声化しなかったため脱落は既に俗語 ラテン 語で起っている。

positum 俗.ラ. postum>*puesto*; reputo 俗.ラ. *repto>*rieto*

b) a だけはあらゆる場合に保存されたようである。

anătem>*ánade*; raphănum>*rábano*; orphănum>*huérfano*; sábane>*sábana*

c) 又、子音が重り合って一度に発音出来ないと云う不都合な場合を生ぜしめないために、たとえ条件は § 1 であっても、母音の残った場合がある。

lacrīma>*lágrima* (この場合、原則として期待されるのは i ではなくて e で *lagrema である); hōspitem>*huésped*

しかし中には、後期に至って学習した結果生じたものも少なくなく、次の場合などそうである。

arbōre>*arbol*; calīce>*cáliz*; cerpitem>*cesped*; jūvēne>*joven*; originem>*orígen*

§ 3 一語中、主なアクセントと第二次のアクセントの間にあるアクセントのない母音。

a) 母音 a を除いては、上記の場合全部消失した。

catenatum>古. 西. cañado>*candado*; comitātum>*condado*; malēdico>*maldigo*; honōrare> *honrar*; septimana> 古. 西. sedmana> *semana*; temporaneum>*tempōranu>*temprano*; verēcundia>vergundia>*vergüenza*.

尚アクセントのある音節の前に一つ以上の母音があるときは、アクセントに最も近い母音が消えた。

vicīnitatem>*vecindad*; ingēnērare>*engendrar*; recūpērare>*recobrar*

b) § 1 の場合同様 a はそのまま残存した。

paradisum>*paraíso*; calamēllum>*caramillo*; *rheumatīcūrm>*romadizo*

C 語尾の位置

§ 1 俗語ラテンの a 及び o は存続した。

amat>*ama*; amicam>*amiga*; arma>*arma*; amo>*amo*; lego>*leo*; quandō>*cuando*; tempus>*tiempo*; poetam>*poeta*.

只、こゝで例外として a と次に来る母音 i との間の相互同化現象によって a>e となる場合があり、中世のイスパニア語にもこれは多かった。直説法半過去の語尾 -ía 等が初期のイスパニア語では -ie に変った他、所有形容詞の mie, tue, sue などとも挙げるべきであろう。

又、o の脱落、或はその代りに何かの母音が現われたりするの、文章論上の理由 (proclisis) によるものでその語自身が有する音韻上の理由によるものではない。

ángel, apóstol, don, muy, primer, san, según, etc.

§ 2 e

a) 俗語ラテンの ē, ē 及び ī は皆 e となり、それは又それに先行する子音が最後の音節の一部である時は脱落した。かくて d, l, n, r, s, z の後では e は脱落した。しかし e の脱落は 10

世紀頃まではまだ一般化されていなかった。又難語としては依然 e が保存された (sede, sacerdote, ónice, clemátide, paraselene 等)。尚15—16世紀まで felice, infelice, falace, fenice 等が用いられていた。

civitātem>*ciudad* (> 古. 西. ġibdat); mare> *mar*; mensam, *mese> *mes*; panem> *pan*; rete>*red*; vilem>*vil*; vīcem>*vez*; pīscem>*pez*

動詞の変化形では、現代語は、初期のイスパニア語が時折落していた e を復活させた。

valet>古. 西. val>*vale*; dicīt>古. 西. diz>*dice*; fēcī>古. 西. fizi, fiize, fiz>*hice*.

b) 子音との結合の後或は b, v, ll, rr, x(j) の後では e は支えの母音として残っている。

amab(i)lem>*amable*; bibīt>*bebe*; axem> exe> *eje*; clavem> *llave*; fōllem> *fuelle*; habūi>古. 西. ovi, ove>*hube*; trabem>trabem> *trabe*; tūrrem> *torre*; *und(ē)cim> 古. 西. ouze<*once*

c) 連続母音 (hiato) にある最後の e は y(i) になる。

regem 俗. ラ. *reye>ree>*rey*; bōvem 俗. ラ. bōem>buee>*buey*

第二章 子 音

イスパニア語へと移ったラテン語の子音の運命は、他の言語に於て見られる一般的言語現象の他に、特にそれが語頭にあるか語中か或は語尾にあるかによって決定されていた。そして概して語頭の位置では f を除いて、皆、ラテン語の時代のまゝ保存されており、中間の位置では、それを狭む前後音の状況によって、やがて次にも述べる如く或る程度変化している。例えば無声音が有声化したり、有声子音のあるものは消失するなどがそれである。語尾の子音は格変化或は活用形に於て弱められる場合が多く、従って一般に消失する傾向にあった。

A 語頭の位置

a) 単一の破裂音は、それが唇音 (p, b) であろうと、歯音 (t, d) であろうと咽頭音 (a, o, u の前の c, g) であろうと、何れも変らず保存された。

pater, patrem>*padre*; bibit>*bebe*; tectum>*techo*; dentem>*diente*; colorem>*color*; guiam>*guía*; bonum>*bueno*; blītum>*bledo*

又子音 r が次に来る場合も存続した。

braca>*bragas*; brutus> *bruto*; credo> *creo*; crucem> *cruz*; draconem> *dragón*; praesunt>*presente*; tramam>*trama*; triticum>*trigo*

稀には古典ラテン語の語頭のc (a, o, u 又は r の前の) はイスパニア語では有声化した。

cattum>*gato*; crēta>*greda*

又 v を b の如くに発音する傾向が、俗語ラテンでは多くなってきた。つまり上記両子音の発音の性格が相互に接近してきた。

verrere>*barrer*; vermiculu>*bermejo*; vota (votum の複数形)>*boda*

b) 古典ラテン語に於ける語頭の子音 l, r, m, n, s, v はイスパニア語では保存された。

lacūna>*laguna*; lēpōre>*liebre*; rota>*rueda*; radice>*raiz*; multum>*mucho*; mutilu
>*mocho*; novum>*nuevo*; seta>*seda*; summariu>*somero*

尚語頭の s は、8世紀頃からアラビヤ式に発音される様になり〔š〕(正字法上は x と書かれた) こゝから現代イスパニア語の j が生じた。

sapōnem>*xabon*>*jabón*; sucu>*xugo*>*jugo*; sepiā>*jibia*

c) ラテン語の発音に於ける h は実際何の意味もないが、俗語ラテン語では全く無価値で屢々省略された (aven, ombre, onor, eredero など)。後語源学的な反省から語頭の h が復活された。

d) ラテン語の f の発音はイスパニアに於ては15世紀頃まで残ったが、その後は一般に母音前で無気音となり、現代イスパニア語でも h の字は書かれてはいるが全然発音されない。又 -uer 又は -ier の前では唇歯音となった。

fabulare>古.西. *fablar*>*hablar*>(h)*ablar* (hは事実上発音されない) folia>*foja*>(h)*oja*
follicare>*folgar*>(h)*olgar*; factum>*fecho*>(h)*echo*; ferrum>*hierro*; ficum>*higo*

e) 咽頭音 c, g は一般に保存されたが e, i の前では多少変化が生じている。既に、俗語ラテンでは此の g は y(i) になった。

germanu>古'西. *ermano*>*hermano*; genesta>*hinierta*; gela)e>古.西. *elar*>*helar*

f) アクセントのない音節では俗語ラテンの y は e, i の前で消失した。

germanum>*iermano*>*ermano*>*hermano* (但しこの場合の h は元来 g 自身とは直接の関係はない); jactare>**iechar*>*echar*

アクセントのある音節に於ては y は e, i 及び a, u の前で存続した。

gypsum>*yeso*; jacet>*yace*; jam>*ya*; jugum>*yugo*

ě の前では y は存続した。

gēnērūm>**yĭerno*>*yerno*; gemma>**yĭema*>*yema*; gĕlu>**yĭelo*>古.西. *yelo*>*hielo*

g) 数多くの場合について云える事だが、俗語ラテンの y は a 或は後方母音 o, u の前で j(dz) となった様でこれから現代の軟口蓋音 j[x] が来ているが、これはアクセントの有無にかゝらず行われた。

jam magis>*jamás*; diŭrnata>*jornada*; jŭvis>*jueves*; jŏcum>*jwego*; jŭncum>*junco*;
jŭvĕnem>*juven*; jurtum>*justo*; judicium>*juicio*

h) e (ae, oe) 及び i の前で, c は既に古典ラテン語時代の後期に破擦音化しはじめたと思われる。初期のイスパニア語では無声破擦子音 ts (ç と書かれた) となった。

cĕra>çera>*cera*; cĕntum>çiento>*ciento*; caelum>çielo>*cielo*; coena>çena>*cena*;
cĭvitātem>çibdad>*ciudad*

i) pl, fl, cl の結合は口蓋化され, ll と書かれているがこれはラテン語の ll も亦口蓋化された結果であると見られる。古代イスパニア語の初期, この口蓋化された音は只の l だけで書き表されていた。l の場合には口蓋化の力は明白である。pl, fl の場合では ll になるまでの中間の過程を推定する事が可能である。しかし l それ自身, その最初の結合時に於て口蓋化的性質を有していたとも考えられる。たとえば イタリア語の piano, fiamma がラテン語の planum, flamma から来ている事を見れば, 理解し易いであろう。

planum>*llano* (plano もあるが, これについては次項参照); plorare>*llorar*; plenum>*flamma*>*llama*; clamare>*llamar*; clavem>*llave* (clave もある)。

然し pl, fl, cl が口蓋化された ll になると云う規則には沢山の例外がある。その中の幾らかは明らかに習得したものであり, 又それらが比較的後代になって借用されたものであると云う事実にもよる。

planta>*planta*; placĭtum>*plazo*; flaccum>*flaco*; flos, florem>*flor*; clarum>*claro*
fl の場合に於ては口蓋化された l (ll) が或る場合に発展して後になった様である。

flaccĭdum>*lacio*; Flammŭla>*Lambla, Lambra*

j) 全く通常の用法では, 語頭の gl は ll (口蓋化された l) の段階を経ず, すぐ様 l となった様である。

俗. ラ. *gliŏnem(ラ. glis)>*lirón*; glattire>*latir*; 俗. ラ. *glandinem(ラ. glans)>*landre*
語頭の gl を残しているイスパニア語は後に至って習得されたものか, 半習得されたものである。

k) 語頭の qu はアクセントのある a の前では cu となって残っている。

quando>*cuando*; qualem>*cual*; quattuor>*cuatro*

a 及び o の前のアクセントのない位置では qu はその唇音 u を失い k(c) となった。

quattuordecim>*catorce*; 俗. ラ. *quemo (アクセントなし)>*aomo*; quasi>*casi*; quantitatem>*cantidad*

e, i の前で qu はその唇音 u を規則的に失った。

qui>古.西. qui ((ki] と発音する, 又 qu の u は e, i の前では無音である)>que; quēn
>quien; quindecim>quince; quietus>quieto. quaero, 俗. ラ. *quero>quiero; quinque
は俗. ラ. で既に u を失い *cinque となっていた。そこから cinco.

- l) s + 子音ではじまるラテン語の語彙は一切接頭語 e をつけた (元来, 古. 西. ではであった)。
scribo>escribo; schola>escuela; sponsus>esposo; statum>estado

B 語中の位置

a) 先づ母音間の位置では無声破裂音 p, t, c (a, o, u) は, 単独で存在する場合は b, d, g と
有声化し, 二重である時は依然無声だがそれが単音となる。この傾向は既にイスパニア語では古
典ラテン語にさえ見られるもので, たとえば第2世紀頃の作品には imudavit (immutavit の代
りに), celtigum (celtiam の代りに) eglesia (ecclesia の代りに), lebra (lapram の代りに)
などの語が伺われる。

sepēre, 俗. ラ. *sapēre> saber; vita> vida; metu> miedo; pacat> paga; securum>
seguro; cuculla> cogulla; cippu> ceppo; cattum> gato; pratu> prado; cepulla> cebolla
lupum> lobo; sagitta> saeta; gutta> gota; mittere> meter; captare> *cattare> catar;
ips> esse> ese

r に後行される無声破裂音は有声化した。

capra> cabra; matrem> madre; sacratum> sagrado

母音間及び a の前では qu の結合は g と有声化された。

aqua> agua; aequalem> igual

他の母音の前では q(k) は g と有声化されたが u は失われた。只文字上は u は e, i の前
では保存された。

aliquot> algo; sequor 俗. ラ. *seguo> sigo; sequi, 俗. ラ. sequire> seguir; aliquen>
alguien

e, i 間では qu は有声化されず [k] と発音された。

aeguipum> equipo; aequinox> equinox

これはむしろ新語用法であろう。

現代カスティリア語では p から来た b はラテン語の b に相当する v, b と区別のつかぬ両
唇摩擦音である。しかし m 又は n の後では b 及び v の音は両唇破裂音の b となる。現代の
d はその出所がどこであろうとも摩擦音としての価値を持つ様になった。通常の発音及び時には
洗練された発音に於てすら d は語間及び語尾の位置では消失する傾向がある。

solidatus>soldado>*soldao*; civitatem>*ciudvd*>*ciudá*

i 又は u (つまり半子音) が無声破裂音に続く時は有声化は起らなかった。

sapiat>*sepa*; sapui>古. 西. sope>*supe*

b) 母音間ではラテン語の有声子音 b, d, g は大体に於て b 及び d に若干の変化はあるが保存された。が消失した場合も幾らかある。ラテン語の b は両唇摩擦音となり、ラテン語の母音間の v から来たイスパニア語の b と同価値を持っている。古代イスパニア語では v (u) の綴字が常だった。

probare>古. 西. provar>*probar*; bībēre, 俗. ラ. *bībēre>古. 西. beber>*beber*; nōvum>*nuevo*

一方ではラテン語の v が i の後で消失したが b は両唇摩擦音として残った。しかし先行する唇母音 o, u の後で b は消失し得た。

rivum>río; ūbi>*9t(e)>*ou>古. 西. o→do (>de ubi)>*donde*; sūbūndare>*sondar*; *sūbūmbrarium>*somqrero*

母音間の d は大抵の場合消失したが例外として sudar, sudor, nido, nudo, crudo などがあるが、これは恐らく cultismo によるものであろう。

c) 鼻音及び流音は残存した。

ramum>*ramo*; poena>*pena*; pīlum>*pelo*; parare>*parar*

mm は例によって m と単純化したのに nn 及び ll は口蓋化し、rr は顫音として発音される様になった。

flamma>*llama*; annum>*año*; callem>*calle*; fōllem>*juelle*; pēllum>*pielle>*piel*; carrum>*carro*

後代になってラテン語から或いは他の言語から採用した語では nn 及び ll は時折 nd, ld となった。

d) ラテン語の無声子音 s はカスティリア語で有声化された。この有声音（通則として古代イスパニア語では s と書かれていた）は再び16世紀には無声化された。

usum>古. 西. uso [uzo]>*uso*

ラテン語の無声子音 ss は古代イスパニア語でも ss のまゝで残り現在は s と書かれている。

amavīssēm, amassem>古. 西. amasse>*amase*; prēssa>priēssa>*priesa, prisa*

ns なる結合字は極く普通の用法では s となった。

menses>*meses*; pensare>俗. ラ. *pesare>*pesar*

C 語尾の位置

名詞に関して云うなれば、ロマンス語の発達はラテン語の対格（目的格）を基調としているが故に、最初では中性の複数を除いて必ず語尾に子音を有していたが、俗語ラテン語に於ては必ずしも発音されなかった様である。

a) s, n, r

s は、名詞では複数のしるしとして、又動詞の変化した形として残っている。

causas > *cosas*; amas > *amas*; minus > *menos*; magis, 俗. ラ. max [maks] > *más*;
sex [seks] > *seis*

n は極く稀にしか語尾に残らなかった。

in > en; non > non (この形から文章論的理由により今日の no になった)

語尾の r が俗語ラテンでどうだったかを明確に知る事はむづかしい。我々は古典ラテン語の pro (しかし合成語の時は por-) に対する俗語ラテンの por を想像する事が出来るがそこからカスティリア語の por が生じている。古典ラテン語の quattuor, semper の代りに我々は俗語ラテンの *quattro, *sempere を想像する事が出来る。これからイスパニア語の cuatro, siempre が来ている。

b) t, nt, st

これらの子音は主として動詞の人称変化と関連して重要性を有している。

先づ最初に t は消失する運命にあった。

amat > *ama*; scribet > *escribe*; aut > *o*; caput > *cabo*

nt は n となった。

amant > *aman*; semt > *son*; dormiunt > *duermen*

st は s となった。

est > *es*; post > *pues* 及びアクセントのない pos (en pos de)

c) m

アクセントのない最後の音節では消失した。古典ラテン語の名詞の大部分は単数の対格の形が m で終わっている。

filium > *hijo*; amicum > *amigo*; poetam > poeta^m > *poeta*

単音節の語に於ては、語尾の m は n となった。

quēm > *quien*; cūm > *con*; tam > *tan*

古典ラテン語の sum は、一見 son となりそうなものだが、直説法第一人称単数現在に於け

る他の動詞の語尾が大てい o である事実に影響され、更に第三人称複数現在の形 *sünt>son* と区別しようとするところから、初期のイスパニア語に於ては *so* が生じ、更に現代の *soy* となった。

d) l, d, c

アクセントのある音節に於ける l の場合は明確なものではない。しかし一般にアクセントのない音節の場合だけ、l は消失した様である。換言すれば単音節の l は存続した。

fee>hiel; *mel>miel*, *in-simul*, 俗. ラ. **insēmül>* 古. 西. *ensemble*

最後の d は一般に失われたが、極めて曖昧な場合もあった。

ad>a; *quid>que*; *mercede>* 古. 西. *mercé>merced* (-ote, -ute などの t から来た多音節の抽象名詞の語尾 -d の多い事に影響された結果である)

c は失われた。

ad-illac>allá; *nec>ni*; *eccum*, 俗. ラ. **accu+hic>aquí*

BIBLIOGRAFIA

1. Alarcos Llorach, Emilio, “Fonología española”, 2a ed., Ed. Gredos, Madrid, 1954.
2. Anónimo, “Calila y Dimna” (la antigua versión castellana), RAE, Madrid, 1951.
3. Idem, “Poema del Cid”, Clásicos castellanos, Espasa-Calpe, Madrid, 1951.
4. Berceo, Gonzalo de, “Milagros de Nuestra Señora”, 2a ed., Col. Austral No. 716, Bs. As., 1947.
5. Díaz y Díaz, Manuel C., “Antología del latín vulgar”, Ed. Gredos, Madrid 1950,
6. García de Diego, Vicente, “Diccionario etimológico español e hispánico”, Ed. SEATA, Madrid, 1954.
7. Idem, “Gramática histórica española”, Ed. Gredos, Madrid, 1951.
8. Gili Gaya, Samuel, “Fonética general”, Ed. Gredos, Madrid, 1950.
9. Lapesa, Rafael, “Historia de la lengua española”, 2 ed., Escerker, Madrid, 1950.
10. Menéndez Pidal, Ramón, “Manual de gramática española histórica”, Espasa-Calpe Madrid, 1952.
11. Navarro Tomás, Tomás, “Manual de pronunciación española”, 6a ed., Madrid, 1950.